

佐伯市戦争遺跡

濃霞山 - 長島山 - 興人

平成16・17年度遺跡分布及び残存状況調査報告書



(佐伯海軍航空隊庁舎)

2006

大分県

佐伯市教育委員会

佐伯市戦争遺跡

濃霞山 - 長島山 - 興人

平成16・17年度遺跡分布及び残存状況調査報告書

2006

大分県

佐伯市教育委員会



瀬田山・長島山 全景



佐伯海軍航空隊 陸上班
機体整備所・第二指揮所・第三格納庫・第一格納庫・第二格納庫・第一指揮所・第一格納庫

序 文

佐伯市は大分県南部に位置し、沿岸部は豊後水道に臨む典型的なリアス式海岸を形成しており、天然の良港に恵まれています。また、内陸部は急峻な山々が連なる山間部であり、豊かな自然をもつ風光明媚で九州一広い面積をもつ都市です。

明治・大正期、佐伯湾ではたびたび海軍の演習が行われ、昭和に入ると佐伯海軍航空隊、佐伯防備隊などが次々に開設されます。戦時体制の下、軍事都市として発展した佐伯市は、真珠湾攻撃の出撃地となるなど先の大戦に深く関わり、戦争末期には海軍施設を中心に空襲の被害も経験してきました。

このたび初めて市内の戦争遺跡調査を行ったところ、海軍航空隊施設跡地周辺の濃霞山・長島山に当時の軍事施設がまだ多く残されていることがわかりました。これらの戦争遺跡は佐伯市の負の歴史をものがたる証人と言えるものであり、次の世代に伝えていくべきものとして戦争遺跡調査報告書をまとめました。

本書を教育及び学術研究に広く役立てていただき、過去の日本と佐伯の歴史について興味、関心をもっていただければ幸いに存じます。

最後に、調査にご協力を賜りました(株)興人佐伯工場、学校法人日本文理大学附属高等学校、佐伯重工業(株)、財務省九州財務局大分財務事務所、各遺跡所有者・管理者の皆様、資料をご提供くださいました皆様、調査を担当していただきました(株)埋蔵文化財サポートシステム大分支店をはじめ関係各位に対し、深くお礼申し上げます。

平成 18 年 10 月 31 日

佐伯市教育委員会
教育長 武田 隆博

例 言

- 1.本書は平成16・17年度に調査を実施した、佐伯市戦争遺跡の遺跡分布及び残存状況調査報告書である。
- 2.本調査地点は佐伯市鶴谷町2丁目12427番6他・中江町12401番1他・東浜11763番他に所在する。
- 3.本調査は佐伯市教育委員会の指導のもと、(株)埋蔵文化財サポートシステム大分支店が平成17年1月28日～3月22と平成18年1月30日～3月29日の間実施した。
- 4.現地での遺構実測、写真撮影の各担当は下記の通りである。
平成16年度〈遺構実測〉池田あゆ子・田中貴・宮吉正明・大谷伸宏
平成17年度〈遺構実測〉五十川慎也・石川哲哉・大谷 〈写真撮影〉五十川・大谷
- 5.航空写真撮影は九州航空株式会社が行った。
- 6.表紙と口絵の航空隊写真は清水建設(株)から提供していただいた。記して感謝いたします。
- 7.本書中の挿図、表、図版編集は佐倉めぐみ、池田、五十川、大谷が行った。
- 8.本調査の記録資料は佐伯市教育委員会に収録、保管している。
- 9.本書の執筆は第1章を吉武敦子(佐伯市教育委員会)、第2章を五十川、第3～V章を大谷、編集は吉武、大谷が行った。

凡 例

- 1.本書で使用した座標数値は日本測地系に基づく平面直角座標系第II系を用い、方位は座標北である。
- 2.遺構寸法単位は基本的にmを用いているが、10cm以下についてはcm、mmを適宜使用している。
- 3.遺構番号は「特殊地下壕実態調査票」(S54都市内防空壕実態調査、H7～13特殊地下壕実態調査、平成16年度教委現地調査より)の整理番号に、今回の調査で新たに確認した遺構に番号を追加したもので、濃霞山・長島山・興人と名を冠し使用した。
- 4.「遺構台帳」の壕の幅、高さの計測値について実数は開口部を、コンクリート等構造があるものは()内にその規模を示し、それに〈 〉がついているものは残存、計測可能数値を示す。延長、興りの残存、計測可能数値も〈 〉とする。
- 5.本文の記述用語は常用漢字を用いるが、引用資料等の固有名詞は原表記を尊重した。

本 文 目 次

第1章 はじめに	
1.調査に至る経緯	1
2.調査体制	1
第2章 遺跡の立地と歴史的背景	
1.地理的環境	2
2.歴史的環境	2
第3章 調査の成果	
1.濃霞山	4
2.長島山	11
3.興人	23
第4章 史料調査	27
第V章 まとめ	35

挿 図 目 次

第1図 佐伯海軍航空隊周辺施設配置図(国土地理院発行「佐伯」1/25000使用)	3
第2図 濃霞山8遺構実測図(1/120)	5
第3図 濃霞山19-34遺構実測図(1/300・1/100)	7・8
第4図 濃霞山27遺構実測図(1/120)	9
第5図 濃霞山30遺構実測図(1/120)	10
第6図 長島山6コンクリート基礎残存状況	11
第7図 長島山11コンクリート製飛架配置状況	12
第8図 長島山6遺構実測図(1/200・1/100)	13・14
第9図 長島山8遺構実測図(1/150)	15
第10図 長島山11遺構実測図(1/150)	16
第11図 長島山26北遺構配置図(1/300)	17
第12図 長島山26南遺構配置図(1/300)	18
第13図 長島山30遺構配置図(1/400)	19
第14図 長島山30-3遺構実測図(1/150)	21・22
第15図 興人1遺構実測図(1/200)	23
第16図 「佐伯 地形圖」	27
第17図 佐伯海軍施設航空写真解析図	28

第18図 「佐伯海軍航空隊・居住区・水上隊・陸上隊格納庫・地帯略図」	30
第19図 「佐伯防備隊本隊施設圖」	30
第20図 佐伯海軍航空隊飛行場爆撃時航空写真	31
第21図 「興國人絹パルプ株式会社佐伯工場敷地實測圖」写	32

表 目 次

第1表 遺構台帳	24～26
第2表 佐伯防備隊兵器装備一覧	29
第3表 年 表	33・34

写 真 図 版 目 次

図版1 濃霞山(南西から) 長島山(西から)
図版2 長島山山頂機銃台座跡 掩体壕
図版3 濃霞山1 濃霞山5 濃霞山8 濃霞山11 濃霞山13標識 濃霞山13 濃霞山14標識 濃霞山14
図版4 濃霞山15標識 濃霞山15 濃霞山16・17 濃霞山16標識 濃霞山16
図版5 濃霞山17標識 濃霞山17 濃霞山18 濃霞山19 濃霞山19内部施工途中
図版6 濃霞山34 濃霞山23 濃霞山27 濃霞山28 濃霞山30 濃霞山30開口部(壕内より) 濃霞山39 濃霞山43
図版7 長島山5～11 長島山6 長島山8 長島山9 長島山11
図版8 長島山11被弾状況 長島山13 長島山15(長島山15は建物に内包) 長島山15 長島山17(右は障壁) 長島山26北全景 長島山26-2機銃台座 長島山26-2機銃台座輪受部
図版9 長島山26-5掩蔽部天蓋 長島山26-6 長島山26-10建物跡(正面より) 長島山26-10水樽縁に「高」の字 長島山30-1・8～11 長島山30-3開口部(壕内より) 長島山30-3開口部(壕内より) 長島山30-6
図版10 長島山34(白線が範囲) 長島山38境界柱 興人1掩体壕 興人3 興人4

第I章 はじめに

1. 調査に至る経緯

佐伯市には昭和初期に佐伯海軍航空隊、佐伯防備隊等が設置され、先の大戦に深く関わった軍都としての歴史がある。当時の航空隊庁舎は佐伯市鶴谷町に現存し、今は海上自衛隊佐伯分遣隊が使用しているが、隣接する兵舎建物は取り壊され、跡地は公園として整備されている。また、公園の一面には佐伯市平和祈念館やわらぎが建設され、航空隊関連の資料、遺品等を展示公開している。

この庁舎と兵舎を中心とした基地周辺には今でも当時の遺構がかなり残されており、中でも濃霞山・長島山一帯に残る地下壕群はかなりの数に及ぶ。しかし戦後60年が経過し、コンクリートの耐用年数等を考慮すると、今後遺構の崩壊が急速に進行することが予測され、現存する戦跡の保存整備について検討することとなった。そこでその前段階として、各遺構の正確な数と位置、保存状態について把握することを目的に調査を実施した。

調査は(株)埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、平成17年1月28日～3月22日までと平成18年1月30日～3月29日までの2カ年で実施した。16年度は濃霞山・長島山山頂部から山麓までの遺構の確認と分布図の作成及び一部地下壕の実測、17年度は長島山地下壕と興人敷地内の掩体壕各1基の実測、写真撮影及び調査報告書作成を行った。

2. 調査体制

調査の組織は以下のとおりである。

調査主体	佐伯市教育委員会
調査責任者	佐伯市教育委員会 教育長 武田隆博
調査事務	佐伯市教育委員会社会教育課 課長 久保田成太
	同 係長 亀井直美
	同 副主幹 吉武敦子

調査担当

平成16年度	(株)埋蔵文化財サポートシステム 大分支店 大谷伸宏 田中 貴 石川哲哉 池田あゆ子 宮吉正明
平成17年度	(株)埋蔵文化財サポートシステム 大分支店 大谷伸宏 石川哲哉 佐倉めぐみ 執行敏秀 五十川慎也

第二章 遺跡の立地と歴史的背景

1. 地理的環境

当遺跡の所在する佐伯市は大分県の南東部に位置し、気候は温暖多雨を特徴とする南海型気候区にあたる。この地域の沿岸部は典型的なリアス式海岸を形成して、遠く紀伊・四国の阿山と連結し九州山地の一部となっている。山地から流れ出る水は支流を集め番匠川・堅田川・木立川となり、それぞれ佐伯湾に流入している。これら河川は上・中流域で規模の小さな谷底平野をつくり、下流域においては三角州を発達させている。この番匠川河口の三角州一帯に長高山・濃霞山・興人は立地している。

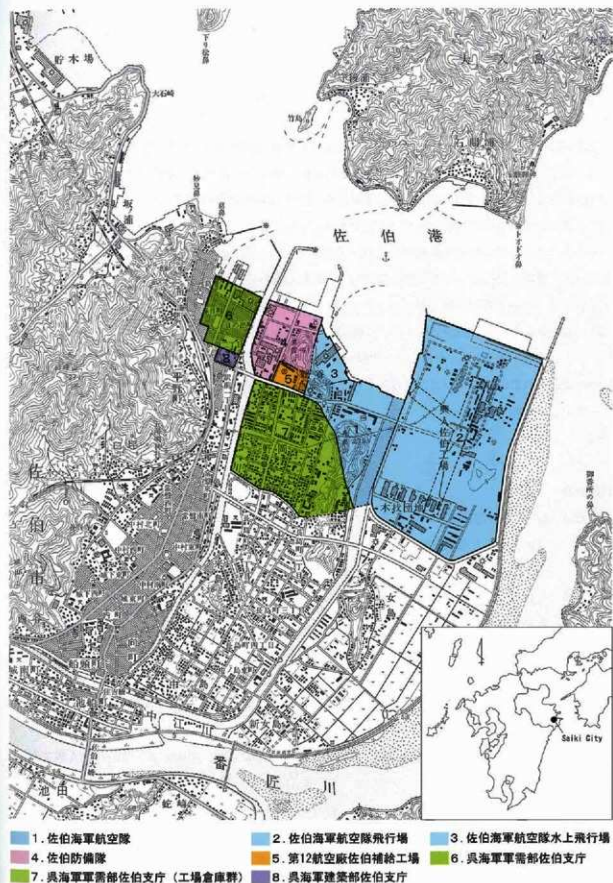
長高山・濃霞山は海岸形成時に残った島嶼であり、地質的には四万十帯に属し、大部分は砂岩や泥岩からなるが、濃霞山の一部に凝灰岩・凝灰岩質泥岩もみられる。土壌は砂岩・泥岩類を母材とする弱乾性の風化土壌である。長高山南側は以前、耕作地として利用されていたが現在は灌木に覆われ、濃霞山は公園として整備されている。一方、興人は、カキ、ハマグリなどの貝類が自生する干潟であったが航空隊建設にともない埋め立てられ、現在この一帯には多業種の企業が立地している。

2. 歴史的環境

佐伯市の市街地は慶長6年に毛利高政が日田・玖珠から転封されて入部し、番匠川河口の八幡山頂に城を築くとともに、その麓に城下町を建設し、以後、明治2年の版籍奉還まで毛利氏が佐伯藩を治めた。明治4年の鹿藩置縣の際佐伯県となり、明治8年には塩塚村・大船繫村とが合併し大分県第4大区26小区佐伯村となった。明治22年には市町村制が施行され佐伯町と改められ、昭和12年には上堅田村・鶴岡村を合併した。そして、昭和16年4月、八幡村・西上浦村・大入島村を合併し、市制を施行して佐伯市となった。明治16年には島港が開港され、その後、道路や電気・水道など住環境整備も進み、大正5年には日豊線が佐伯まで延び、産業・経済・文化の中心地としての機能を果たした。佐伯と軍政の間わりは文久3年、女島沖ノ州に台場が築かれたことに始まり、明治の終わりから大正、続いて昭和にかけて、ほぼ毎年、艦隊が次々と佐伯湾に集結して訓練を行っていた。その後、昭和9年に佐伯海軍航空隊、昭和14年に佐伯防備隊が相次いで開隊し、昭和16年には真珠湾攻撃直前に佐伯湾で連合艦隊の演習が行われた。昭和20年8月15日に敗戦を迎えるまで佐伯も軍事一色に染まることになる。

【参考文献】

- 佐伯市史編さん委員会『佐伯市史』1974 大分県『大分県史地誌編』1989
 大分県『大分県史近代編IV』1988 大分県『土地分類基本調査佐伯・鶴岡崎5万分の1』1995



第1図 佐伯海軍航空隊周辺施設配置図(国土地理院発行「佐伯」1/25000使用)

第三章 調査の成果

1. 濃霞山

概要

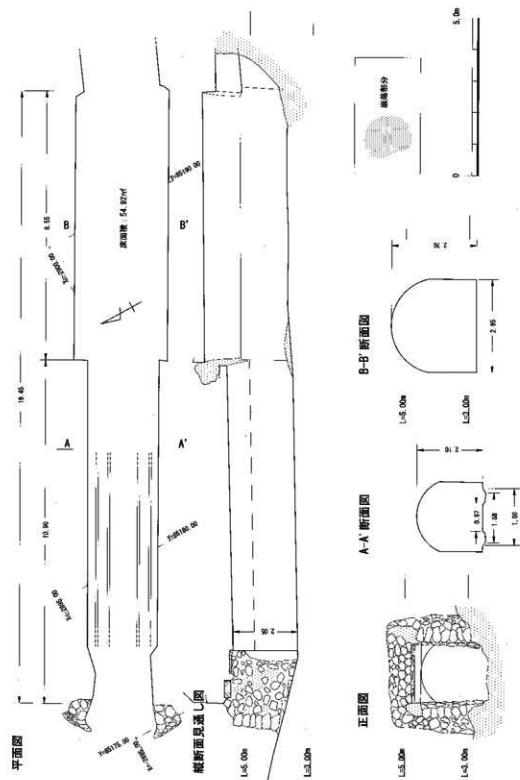
濃霞山は佐伯市鶴谷町二丁目に所在する。標高 62.00m、山稜は西に外湾しつつ南北に長く通る急峻な山である。面積は 80000 m² を測る。山の地質は基本的に砂岩より成るが部分的にチャートを含む。当時は佐伯海軍航空隊、第 12 航空廠佐伯補給基地、佐伯防備隊が境界を接する全面軍用地帯であったが、現在は濃霞山公園として整備され市民に開放されている。

山とその周辺に残る施設を概観すると以下の通りである。山頂部は配水関連の施設が残っているが、それ以外に遺構と見られるものは平出部のみである。遺構の多くは山腹から山麓に分布する。山腹北部にはコンクリート造掩蔽建物 2 基、コンクリート巻立⁽¹⁾ 造地下壕 1 基、索掘の塚 1 基、空爆の痕跡と見られる円形の窪地 2ヶ所が分布する。山麓部は、北部から北西部にコンクリート造建物 1 基、コンクリート巻立造地下壕 12 基、南端にコンクリート造建物 1 基、コンクリート巻立造地下壕 7 基、門 2 対、東中部は削られているもののコンクリート巻立造地下壕 1 基が確認できた。その中で今回詳細に調査したものを以下に報告していく。

濃霞山 8

濃霞山北辺西麓の標高 2.6 m に位置し、主軸を N-118°-E とする。総床面積は 54.92 m²、全長 19.45 m、コンクリート巻立造地下壕である。開口部は荒い石組モルタル造で、天井部は厚み 20cm の板状プレキャストコンクリート⁽²⁾ を梁とする。開口部両脇は坑木の腐食により構造中に空洞を生じている。塚は入口から 10.9 m のところまで幅 2.24 m、高さ 2.1 m で進み、その奥からは幅 2.95 m、高さ 2.7 m と広がる。繋ぎ目部分は空洞になり大小の礫が崩落し堆積している。さらにここから 8.55 m の地点で落盤し、完全に閉塞している状況である。床面には奥行 3.0 m の地点から 6.0 m ほどのところまで 2 条の軌が確認できるが、その幅ではやや狭くなった開口部からは出入りできない。床面は軌跡より部分的にコンクリート打と判別できるが、諸々の堆積により覆われているため全体の造りは不明である。

構造は継ぎ足し部分と破断箇所を見るかぎり鉄筋は入っておらず、浸水していないが脆く雑である。



第 2 図 濃霞山 8 遺構実測図 (S=1/120)

濃霞山 19・34

濃霞山北西部の標高 14.0～14.5 m に位置し、緩やかに張り出した稜線の中腹を貫通する。壁面厚さ 40cm のコンクリート巻立造の地下壕で、部分的に素掘り、全長 98.5 m を測る。19 の開口部は幅 2.5 m、高さ 2.45 m で、1 対のコンクリート陥壁をもつが未完成である。壕内はコンクリート造モルタル仕上げで、床面に溝は無く、奥行き 26.75 m のところで素掘りとなる。素掘り部分が 7.0 m つづいた後、再び両側に溝をもつコンクリート造に変わり、幅が 2.5 m、高さが 2.27 m となる。この素掘り区間は工事途中で放置されているため、壕の施工過程を見ることができる。壕はさらに蛇行しつつ 17.9 m、次いで直線で 46.85 m 伸び濃霞山 34 開口部に至る。34 側の陥壁（厚さ 0.6 m）1 対は完成している。途中壕の脇には横穴が 5 箇所穿たれていたが、岩盤むき出しで大小の礫が積もり危険なため略測のみとした。34 開口部より 2 基日の横穴だけは直線で 15 m 以上伸びていることが目視で観察できた。同じく 3 基日の切羽面には、削岩機による直径 3 cm の発破孔と思われる穿孔 3 箇所が、約 1.0 m 間隔で認められた。構造は杭木等を含有する鉄筋無しのコンクリート巻立のため、壁は薄く脆い。破断浸水も数箇所見られる。

濃霞山 27

濃霞山南端、標高 2.0 m に位置し主軸を N-113°-E にとる。床面積 22.84 m²、全長 7.7 m、幅 3.0 m、高さ 3.15 m、厚さ 50cm のコンクリート巻立造地下壕である。開口部はモルタル面取り仕上げ、床はコンクリート打で、奥に向かい緩やかに 15cm 高くなっている。内部の造りは丁寧で、現在も内壁には破断、亀裂、浸水は見られず良好な状態を保っている。

濃霞山 30

濃霞山南端、標高 2.2 m に位置し、開口部から 9.21 m 進んだ地点まで主軸を N-124°-E に取り、そこから先は北に 6° 切り返す。総床面積 67.7 m²、全長 28.03 m、幅 2.47 m、高さ 2.57 m の鉄筋コンクリート巻立造地下壕である。濃霞山 26 とつながっており、開口部あたりは上部公園敷地より流入した上砂で塞がれている。途中右手に 3.0 × 3.0 m の空間を持つ。浸水、目立った破断は奥の陥没を除いてみられないが、上かぶり全体的に浅く、公園内遊歩道が直上を運っているため、土砂の流入によって公園内に地隙の生じる恐れがある。なお壕内床面は廃上等でほぼ埋まっており、それに関する計測値は正確さを欠く。

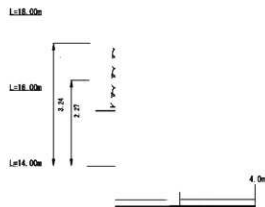
註 1 正しくは「巻立て」。トンネルの掘削前を被覆する構造体、覆工ともいう。

註 2 あらかじめ別の場所で製造したコンクリート部材、または製品。

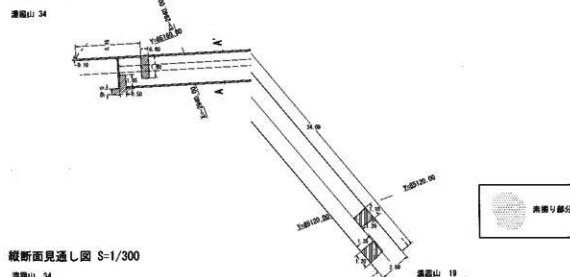
【参考文献】 社団法人日本コンクリート工協会編 『コンクリート便覧』 1976

社団法人土木学会編 『土木用語大辞典』 1999

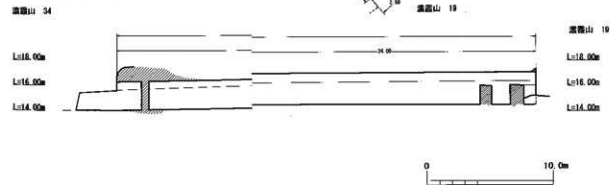
正面断面図 S=1/100



平面図 S=1/300



縦断面見透し図 S=1/300



壁面厚
幅 2.5
ルタル
た後、
区間は
7.9 m、
ている。
測のみ
た。同
間隔で
浸水も

3.0 m、
、床は
内壁に

取り、
鉄筋コ
り流入
没を除
によつ
の計測

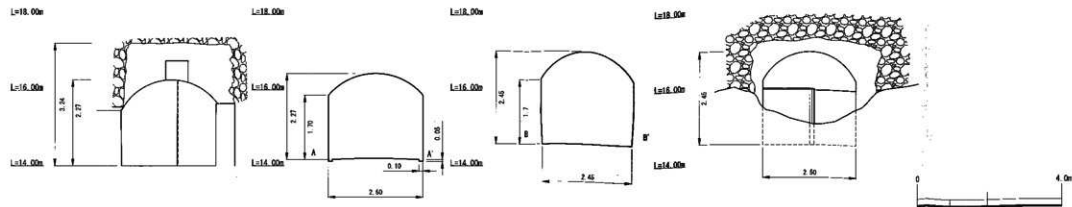
正面断面図 S=1/100

濃霞山 34 正面図

A-A' 断面図

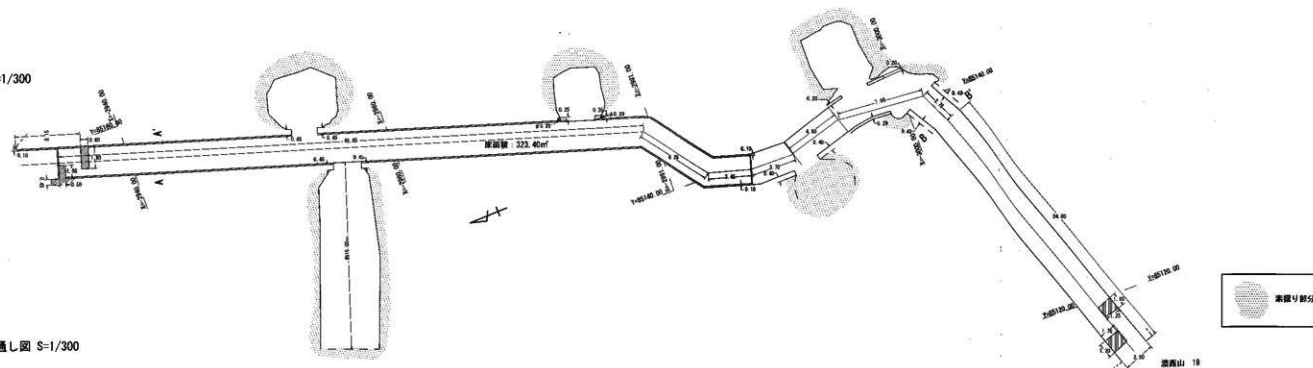
B-B' 断面図

濃霞山 19 正面図



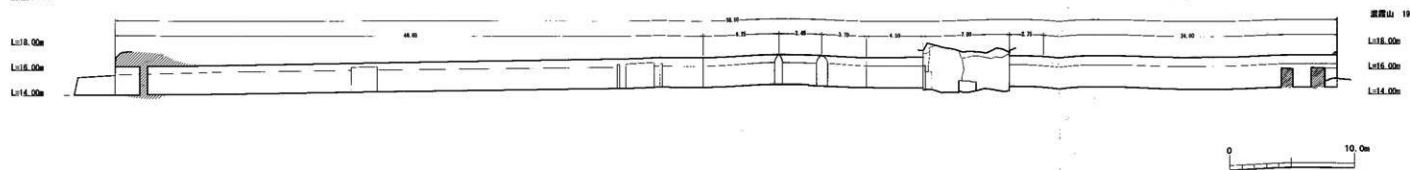
平面図 S=1/300

濃霞山 34

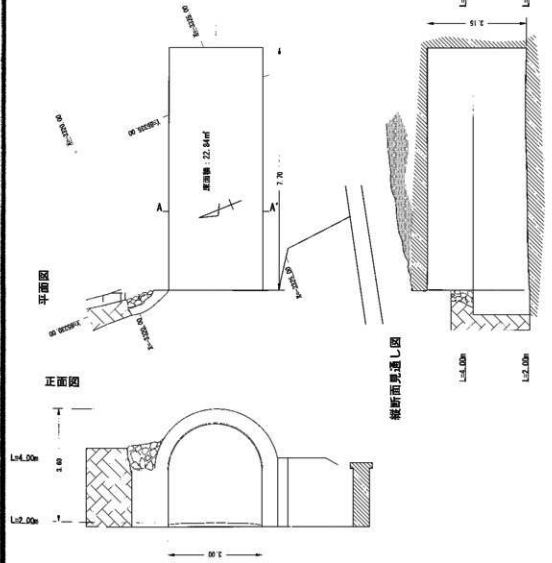


縦断面見越し図 S=1/300

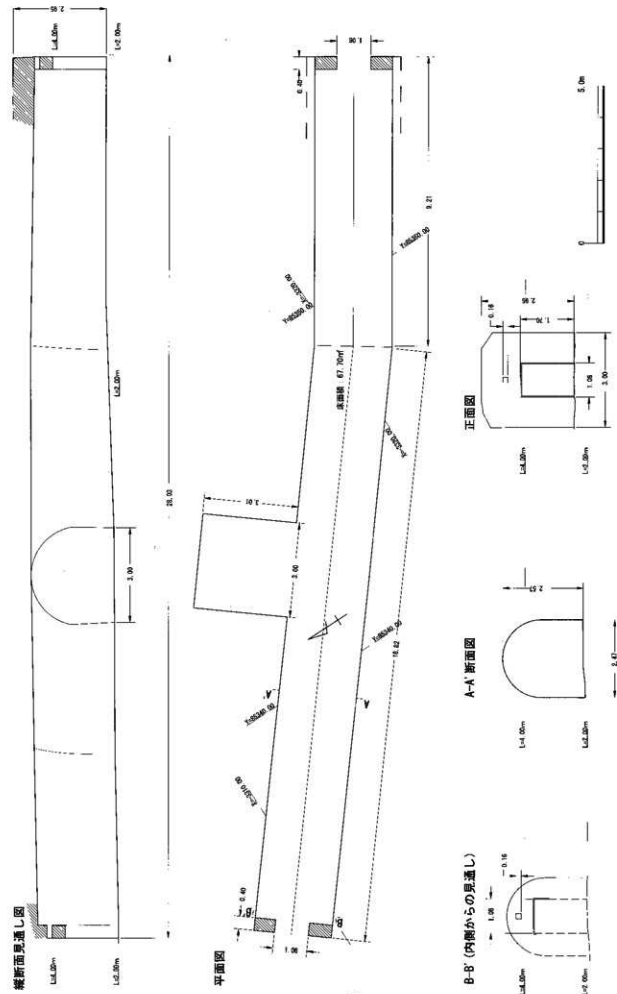
濃霞山 34



第3図 濃霞山19-34遺構実測図 (S=1/100・1/300)



第4図 雲霞山27遺構実測図 (S=1/120)



第5図 瀬島山30遺構実測図 (S=1/120)

2. 長島山

概要

長島山は佐伯市中江町に所在する南北に細長く伸びた急峻な山で、山頂は北部中央の標高79.5m地点、面積は131000㎡を測り、地質は砂岩、泥岩より成る。当時は佐伯海軍航空隊と呉海軍軍需部佐伯支庁とが境界を接し、南端部を除くすべてが軍用地であったが、戦後は民有地となった。

山とその周辺に残る遺構を概観すると以下の通りである。山頂部は削平地にコンクリート造機銃台座4基、鉄筋コンクリート造建物1基、コンクリート造円形遮蔽物1基、南にややドリコンクリート基礎を持つ建物跡1基、さらに主尾根伝いに進むと円形状登地3基、境界標柱2基が確認できる。北東部中腹の削平地にはコンクリート造遺構群があり、他中腹一帯には円形状登地3基、境界標柱3基が点在する。山麓には西側を除いて全体に遺構を確認でき、鉄筋コンクリート造建物2基、コンクリート巻立造地下壕13基、索脚の地下壕6基、隧道1基、井戸1基を数える。中でも東麓に並ぶ開口部に花崗岩アーチを持つ地下壕群は目を引くものである。これらの中で今回詳細に調査したものを報告していく。

長島山6

長島山北部東麓、標高2.0mに位置し、主軸をN-110°-Eにとる。総床面積303.1㎡、全長61.77mのコンクリート巻立造地下壕で、内部が確認できた壕の中で最長最大のものである。開口部は花崗岩切石を放射状に配し、内寸幅5.54m、高さ4.44mのアーチを造り、壕内規模もその連続である。側部は鉄筋コンクリートを幅8.2m、高さ6.15mまで打設し、天端は花崗岩切石を配置している。開口部より1.8m入ると鉄骨鉄筋造の仕切り壁中央に鉄扉があり、両袖の壁面上方にはスレート管が2本、水平に配されている。壕内側壁は鉄筋コンクリート造、アーチ部分は15×35cmのコンクリートブロック造である。床はコンクリートを水平に打設し、壁に沿って溝が廻り、鉄扉より約30mの所から奥に向かっては14基のコンクリート基礎が並ぶ。これらはその配図から7基1組で、本壕が燃料庫であったと考え合わせると2基の油槽の上台と推察される。基礎は破壊されているが一番奥のものは残りがよく、油槽容量は各71~82KLと推計できた。浸水はあるものの、亀裂など目立った破損箇所はなく、保存状態は良好である。なお調査時鉄扉は開いた状態で固定されていたが、実測記述は閉じた状態を復元している。



第6図 長島山6 コンクリート基礎残存状況

長島山 8

長島山北部東麓の標高 2.15 m に位置し、主軸を N-110°-E にとる。床面積は 160.17 m²、全長 31.77 m のコンクリート巻立造地下壕である。開口部は花崗岩切石を放射状に配し、内寸幅 5.55 m、高さ 4.48 m のアーチを造る。壕内も同じ規模で連続する。側部は鉄筋コンクリートを幅 8.12 m、高さ 6.12 m まで打設し、天端は花崗岩切石を笠石とする。開口部より 1.81 m 入ると中央に鉄扉があり、両脇の鉄骨鉄筋造壕の壁面上方にはスレート管が出ている。壕内側壁はコンクリート造で、アーチ部分は 15 × 35cm のコンクリートブロック造、床面は水平にコンクリートが打たれ、壁に沿って溝を廻らせている。鉄扉より 5.1 m 入った床面に、溝を刻んだ長方形の鉄板が 4 枚ボルトで固定されていたが、当時のものか不明である。遺構の現状は浸水、亀裂など目立った破損箇所はなく良好な保存状態である。

長島山 11

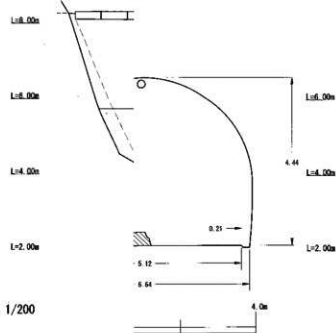
長島山中部東麓、標高 2.0 m に位置し、主軸を N-109°-E にとる。総床面積 76.72 m²、全長 17.6 m のコンクリート巻立造地下壕である。開口部は花崗岩切石を放射状に配し、内寸幅 7.3 m、高さ 5.81 m のアーチを造る。開口部右袖内側には被弾痕が 3 箇所確認できる。正面構造、意匠的には長島山 6、8 と同じであるが、より開口部を広く確保した型である。入口は 14.5 × 30cm のコンクリートブロックを積み上げた外壁で閉塞され



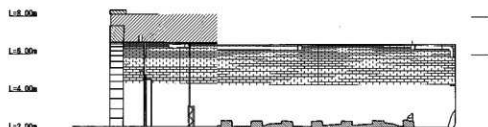
第 7 図 長島山 11 コンクリート製飛梁配置状況

ているが、中央の鉄扉及び左右の板扉を通して中に入ることができる。内部は側壁をコンクリート、アーチ部を 15 × 30cm のコンクリートブロックで巻立後、さらに内側にコンクリートを巻立てて壕を設ける二重構造となっている。外側の壕と内側の壕の間隔は 60cm で、通路状に内側壕の周囲を巡る。両者はコンクリート製飛梁⁽¹⁾により支えられ、飛梁は左右各 5 箇所、側壁床面から 2.0 m の高さで等間隔に配されている。中央扉を入ると内側の壕の前室 (5.5 m × 2.5 m) があり、奥の仕切りを抜けると 5.5 × 11.45 m の空間がある。内側壕の壁と床は板張りの痕跡を残しており、内部側面木材は復元し図化した。ただし現状では床板は完全に失われ、壁の板材も剥落した部分が目立つ。遺構の状態は、正面中央天端より亀裂が垂直に走っている以外は、浸水、目立った破損箇所等はなく良好な状態である。

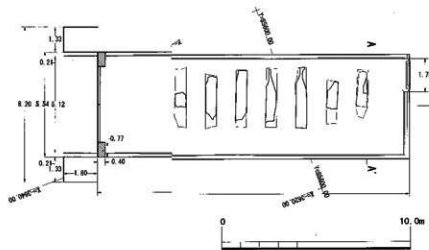
側面図 S=1/1000



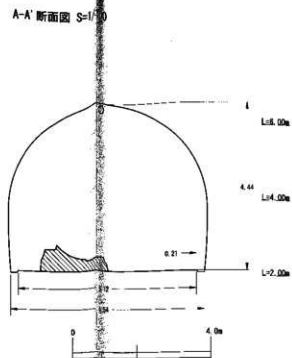
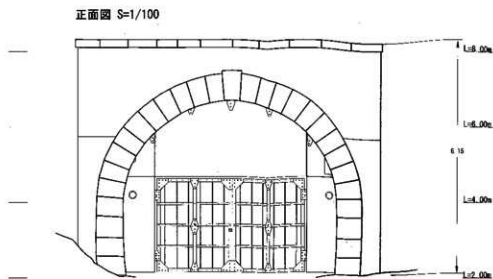
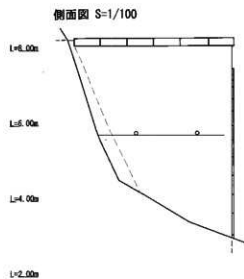
縦断面見直し図 1/200



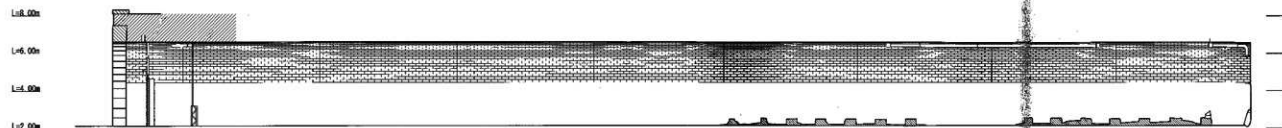
平面図 1/200



1.17 m²、全長
寸幅 5.55 m、
幅 8.12 m、高
さ 鉄扉があり、
アーチ部分
って溝を廻ら
されていたが、
状態である。



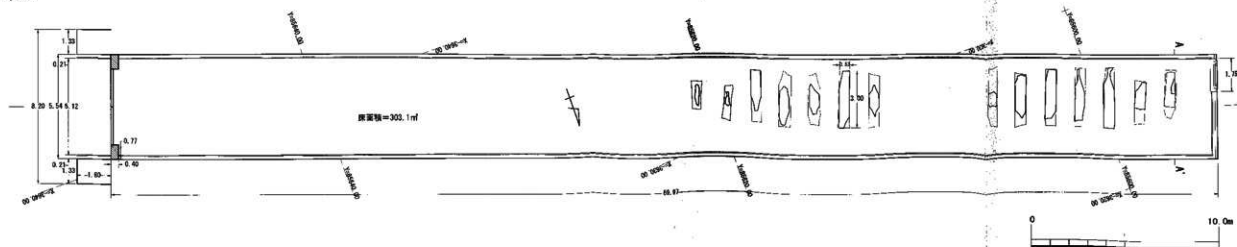
縦断面見通し図 1/200



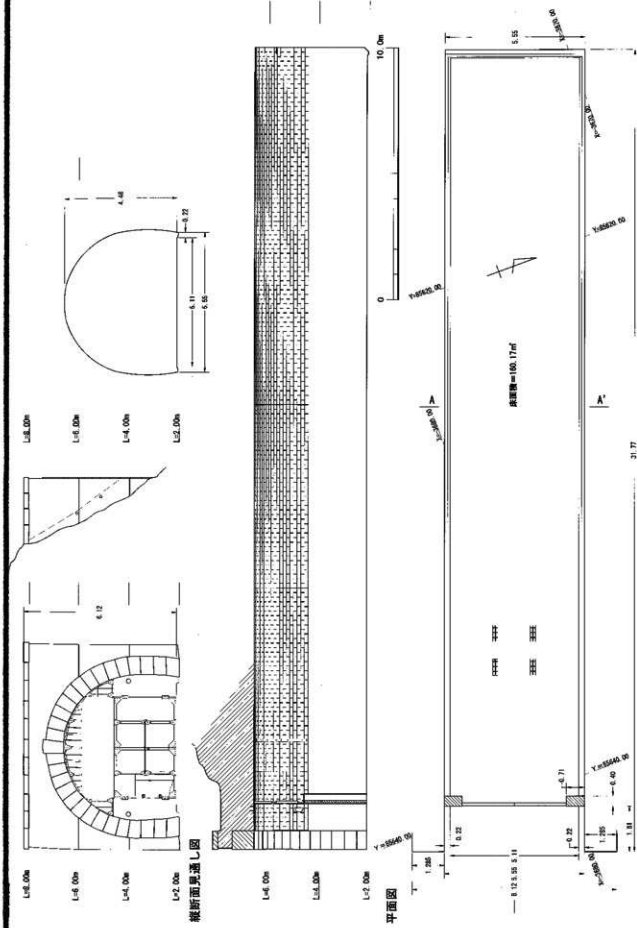
配置状況

クリート、アー
てて縁を設け
剛を巡る。両
りの高さで等間
りを抜けると
材は復元し図
状態は、正面
状態である。

平面図 1/200

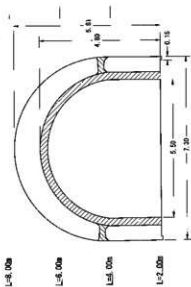


第 8 図 長島山 6 遺構実測図 (S=1/200・1/100)

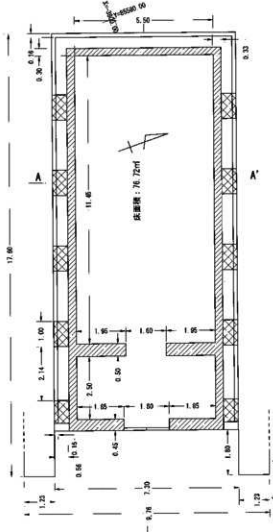


第9図 長島山B遺構実測図 (S=1/150)

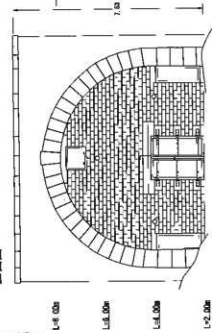
A-A' 断面図



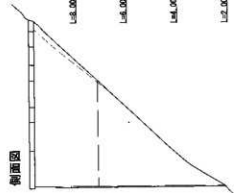
平面図



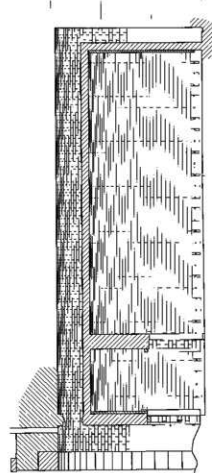
正面図



側面図



縦断面図



第10図 長島山11遺構実測図 (S=1/150)

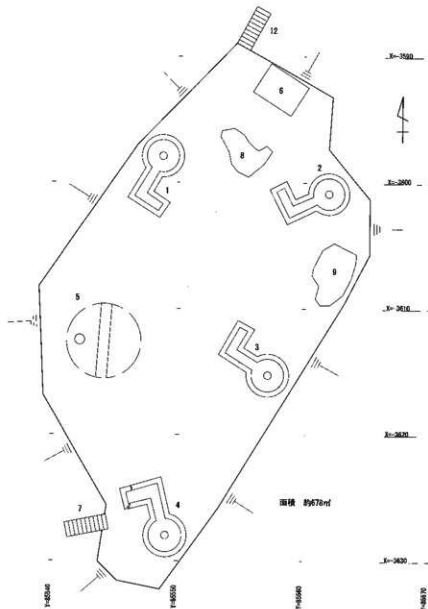
長島山 26

概要

長島山北部の山頂削平地標高 79.5 m と、そこから南東へ 50 m ほど下った削平地標高 72.5 m に展開するコンクリート構造物を主体とした遺構群。以下北と南に分けて報告する。

長島山 26 北

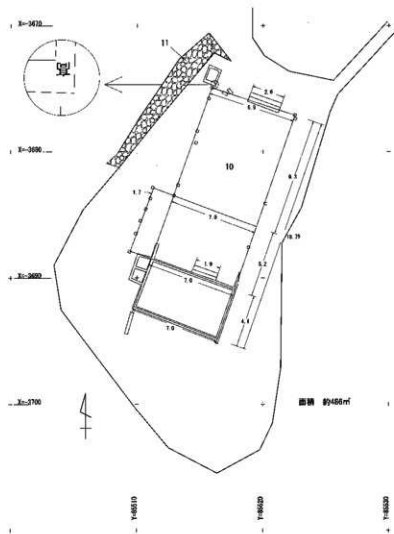
面積は 678 m² である (第 11 図)。1~4 はコンクリート造の台座で、円形部分は直径 2.6m 深さ 1.2m、側壁には幅 37 × 高さ 60 × 奥行 21cm の方形の孔が等間隔に 3 箇所設けられている。床面中心の設置部は直径 60cm、深さ 27cm で、それを径 15mm のボルト 8 本が等間隔に囲む。ボルトは直径 95cm の円周上に配置され、高さ 5cm ほどが残存する。5 は平面形状は正円形で中心に向かい 80cm 高くなっており、その天蓋下に約 2.0 × 2.0 × 2.0 m のコンクリート造の空間を持つ。6 は鉄筋コンクリート造建物、7、12 はコンクリート造階段である。8、9 は塹壕状遺構であるが、底部形状が定かではなく本遺跡に伴うものか不明である。



第11図 長島山26北遺構配置図 (S=1/300)

長島山 26 南

平地面積は 486 m²で、木々が茂っている(第 12 図)。10 はコンクリート基礎建物で、基礎が原位置を保っているため開取りが復元できる。北の階段が正面入口で、中は 3 部屋が縦に並び、一番奥の部屋は右基礎状にコンクリートが打たれている。建物北西隅角外にはコンクリートの水槽があり、緑平面のモルタル整形時に 9 cm 大の「高」の文字が刻まれている。また周囲に広範囲にわたり散らばる多量のコンクリート壁、スレート板材、板ガラス等も当時の建築部材とみられる。11 は砂岩を主体とした石組で露出する部分だけを確認し図化したが、削平地周囲にも部分的に見ることができる。

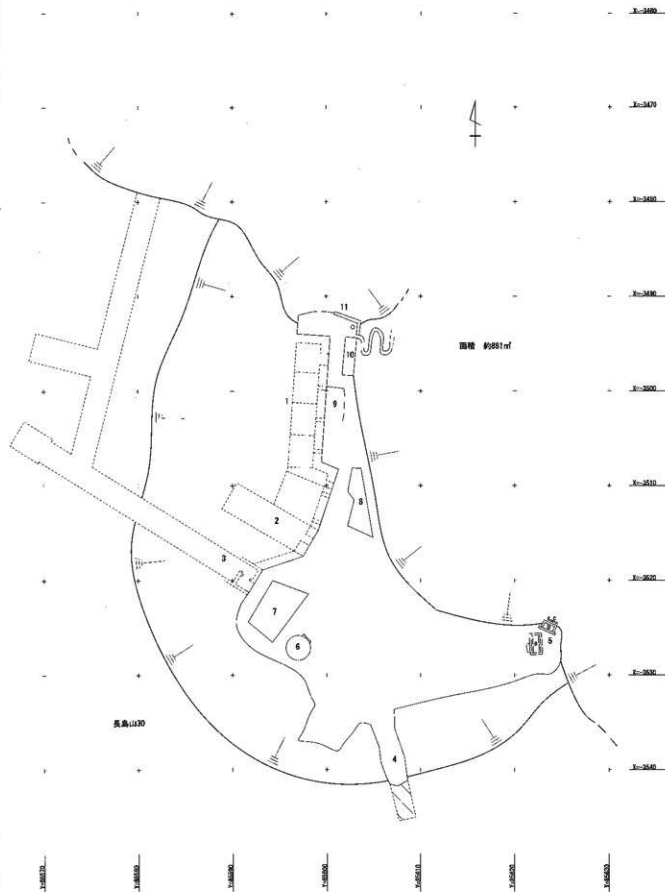


第12図 長島山26南遺構配置図 (S=1/300)

長島山 30

概要

海上自衛隊佐伯分遣隊庁舎の裏、長島山北東中腹の尾根に挟まれた谷斜面を削平了な平坦部面積 881 m²、標高 20 ~ 21 m に立地する遺構群である(第 13 図)。1 は鉄筋コンクリート造掩蔽下に 4 部屋 (16 m²) が並び、各々にのぞき窓を一つずつ持つ。さらに壁を隔てもう一つ部屋が連なる。いずれも内部はモルタル仕上げで、外観は 1.2 m と分厚い。2、3 は鉄筋コンクリート造巻立壕、4 は素掘の壕、5 はコンクリート橋、6 は地下壕の換気塔、7 ~ 11 はコンクリート造障壁で、11 の角内には鉄筋コンクリート造の直径 20 cm、高さ 1.0 m の円柱がある。この中で詳細に調査した 3 を以下に報告する。



第13図 長島山30遺構配置図 (S=1/400)

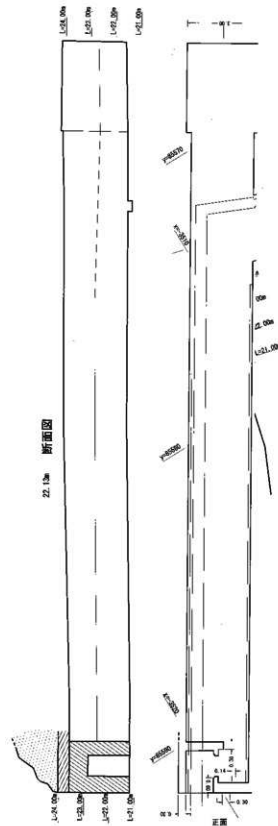
長島山 30-3

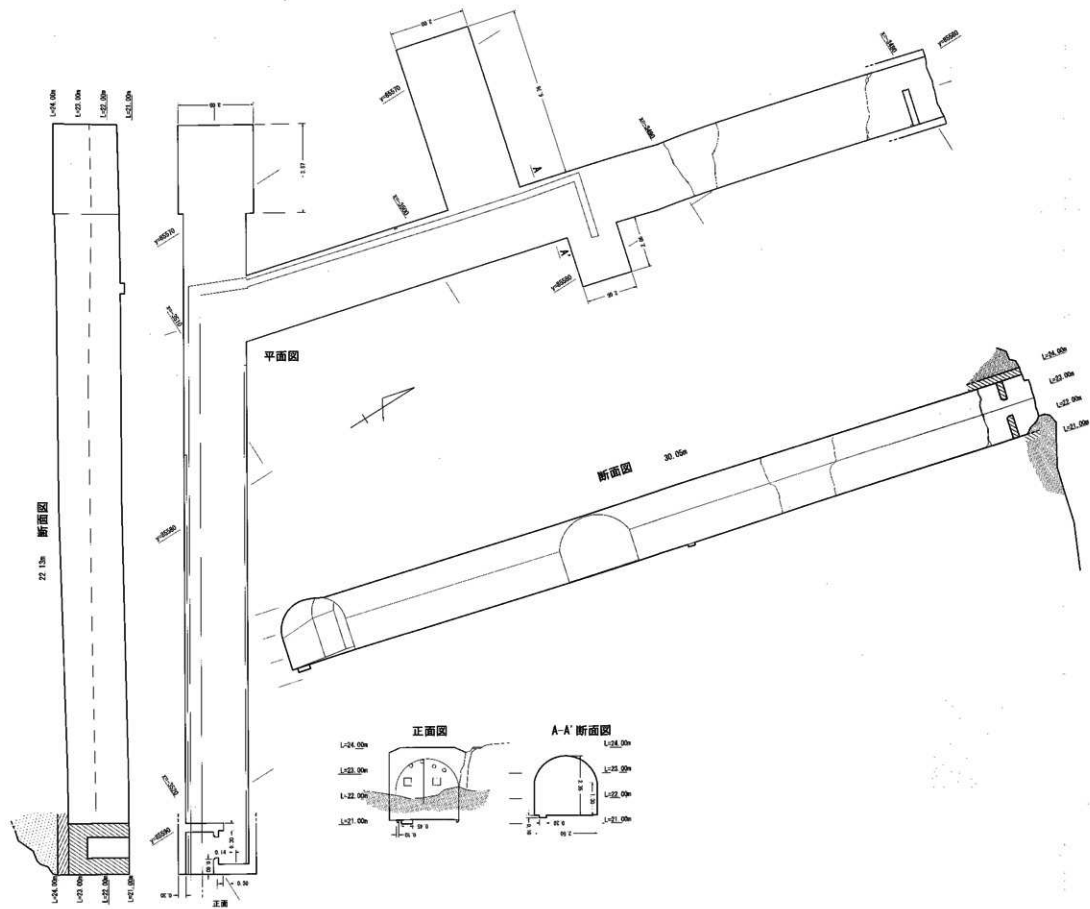
長島山北東中腹の削平地長島山 30 の中ほど、標高 21.15 m の地点に位置する。主軸を N-122°-E にとり、総床面積 173.27 m²、全長 52.18 m の鉄筋コンクリート巻立造地下庫で、平面形状はやや開きぎみの L 字形を呈する。開口部は多量の土砂に半ばまで埋まっていた。入口には厚さ 30cm のコンクリート造障壁が 2 対あり、各々の上部に 30cm 角の方形窓 1 箇所と直径 14cm の円形孔 2 箇所を持つ。壕内を進むと 23.25 m 進んだところで右に 72° 折れ、さらに 30.05 m で絶壁にある反対側の開口部に至る。破損した障壁が 1 枚残存するが、90cm 先で壕が断絶しているため、もう 1 枚の障壁は崖下に崩落したのか、施工途中で終わっているのか不明である。壕の横壁には 3 つの部屋が造られており、各々 3.0 × 3.57 m、3.0 × 6.76 m、2.05 × 2.05 m の方形を呈する。

壕の床面幅は 2.5 m で、3 条の溝をもつ。両端の溝は幅、深さとも 10cm で、奥に行くほど浅くなるので排水溝と考えられる。内側の溝は全長 41.7 m、深さは 10cm で一定であるが、幅は 45cm から途中角を曲がると 28cm に変わる。この溝は高低差がなく最初の杭部屋を過ぎた地点で細くなっていることから、配線を各部屋に分配するためのものと推測した。開口部から出て長島山 30-6 換気塔整坑内へ繋がっているようである。

註1 別名フライングバットレス、飛越えとも言う。ゴシックの教会堂建築において筒型壁の側柱を外側の支柱、壁に伝えるため渡された石のアーチ。ここでは外壁から内壁に渡された梁の名称として使用している。

【参考文献】 株式会社彰田社 『建築人辞典』 第 2 版 1993





第14図 長島山30-3道構実測図 (S=1/150)

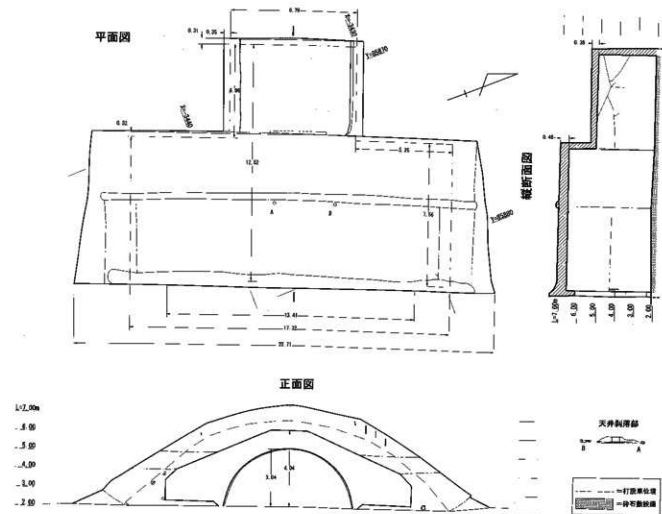
3. 興人

概説

佐伯市東浜に所在する埋立地で、標高は2.0m、佐伯海軍航空隊飛行場跡地の北半を占める。現在も航空隊関連の遺構は残っており、主なものとして国の登録有形文化財に指定されている掩体壕1基のほか、鉄筋コンクリート造建物1基、掩体壕2基等が確認できた。

興人1

鉄筋鉄網コンクリート木製枠造掩体壕で、滑走路に平行に配置されている。開口部は幅17.32m、高さ4.04m、主翼格納部は幅17.32m、高さ4.5m、尾翼格納部は幅6.79m、高さ3.0m、各部合わせた奥行きは12.52m、天蓋壁厚さ50cmを測る。遺構底部は碎石を敷設しており実際の位置、状態は確認できなかった。



第四章 史料調査

1. 今回の史料調査は現地踏査によって確認できた遺構の分布位置や構造に施設名、成立時期を付加するべく、県南歴史資産開発推進市民会発行の『追体験佐伯と海軍』、『佐伯海軍航空隊兵舎保存を求める声—昭和メモリアルパークへのいざない—』、福西正道氏所蔵の佐伯海軍関係史料を始めとし、防衛庁防衛研究所図書館、国立国会図書館憲政資料室米國戦略爆撃調査団資料（U.S.S.B.S.）⁽¹⁾等の資料を調査した。以下主要な史料を掲載し解説を加えていく。

「佐伯 地形圖」

縮尺 1/25000、陸軍參謀本部陸地測量部作成、幅 594mm、高さ 500mm、昭和 2 年測図、昭和 5 年 9 月 25 日発行。國中女島より北東方向に文久三年（1863）築城の台場が確認できる。その後海軍航空隊飛行場建設のため取り壊される。



第 16 図 「佐伯 地形圖」

施設名	形状	面積 (㎡)	長さ (m)	幅 (m)	築造時期	備考
兵舎	コンタクト	-	-	-	佐伯海軍航空隊	1/400
機庫	コンタクト	0.9 (2.0)	1.35 (2.0)	10.0	佐伯海軍航空隊	1/400
地下壕	コンタクト	-	-	-	佐伯海軍航空隊	1/100, 1/400
地下壕	円盤	(2.75)	(1.45)	11.5	-	1/400
水塔	コンタクト	4 2.3×1.3	5	1.0×1.0	佐伯海軍航空隊	1/400
機庫口	コンタクト	4 2.9 (2.0)	5.0	-	佐伯海軍航空隊	1/400
砲台	コンタクト	6.3	4.2	2.3	佐伯海軍航空隊	1/400
砲台	コンタクト、内に機庫	8.1	1.6	2.6	佐伯海軍航空隊	1/400
砲台	コンタクト、内に機庫	0.9	0.6	2.0	佐伯海軍航空隊	1/400
砲台	コンタクト、内に機庫	4.3	2.0	1.6	佐伯海軍航空隊	1/400
砲台	コンタクト	1.90-3.05	0.85	0.3	佐伯海軍航空隊	1/400
西側機庫	-	49.5	-3.0	-	-	1/2500
西側機庫	-	415.0	-3.0	-	-	1/2500
西側機庫	-	47.9	-2.0	-	-	1/2500
西側機庫	-	48.0	-2.0	-	-	1/2500
西側機庫	-	45.5	-1.5	-	-	1/2500
機庫	コンタクト	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	88
機庫	丸形	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	88113
機庫	丸形	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	88114
機庫	丸形	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	88113
機庫	コンタクト	0.5	0.5	-	佐伯海軍航空隊	1/2500

第 6 資料

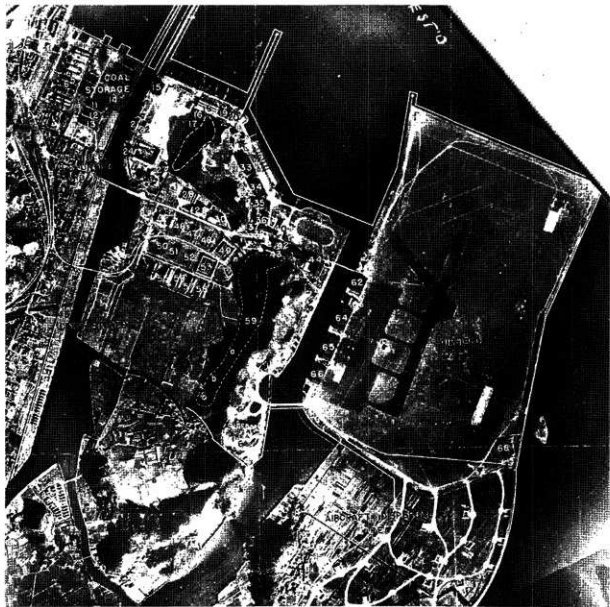
與人

施設名	形状	面積 (㎡)	長さ (m)	幅 (m)	築造時期	備考
機庫	コンタクト	(22.7)	(13.0)	(6.4)	佐伯海軍航空隊	1/200, 1/2500
機庫	コンタクト	(22.0)	(13.0)	(5.4)	佐伯海軍航空隊	1/2500
機庫	円盤は実測コンタクト	1.5 (2.0)	(5.0)	(2.0)	佐伯海軍航空隊	1/2500
機庫	機庫コンタクト	(4.0-4.5)	(6.0-16.0)	-	佐伯海軍航空隊	1/2500

45
61
4
110

佐伯海軍施設航空写真解析図

国立国会図書館蔵 U S B S 「空襲損害評価報告書」より、原図縮尺 1/6000。空襲開始前に攻撃目標対を判別するために昭和 20 年 5 月 7 日作成されたもので破壊される以前の軍事施設配置が分かる。同年 1 月 1 日撮影写真を下地として同年 3 月 28 日撮影のものと対照し⁽²⁾ 報告されている。図中の番号は個々の施設に振られたもので、施設名称等については報告書に掲載されている。この中で施設番号 30 のみ不明とされているが、病院 (病舎) であることがわかっている⁽³⁾。



第 17 図 佐伯海軍施設航空写真解析図

佐伯防備隊兵器装備一覧

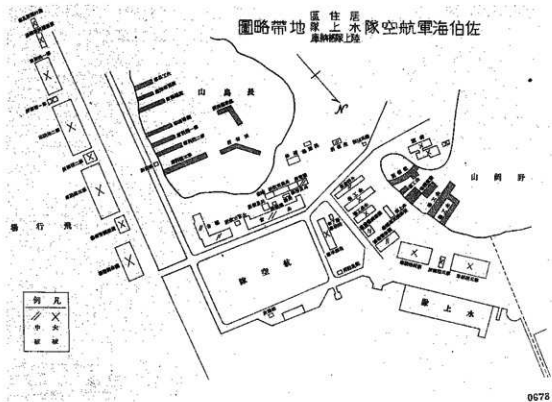
『佐伯防備隊戦時日誌』(自昭和 20 年 2 月 1 日至昭和 20 年 2 月 28 日)中に掲載されている。現在は失われている野岡山 (濃霞山) の対空火力がわかる。

『佐伯海軍航空隊・居住区・水上隊、陸上隊格納庫・地帯略圖』『佐伯防備隊本隊施設圖』

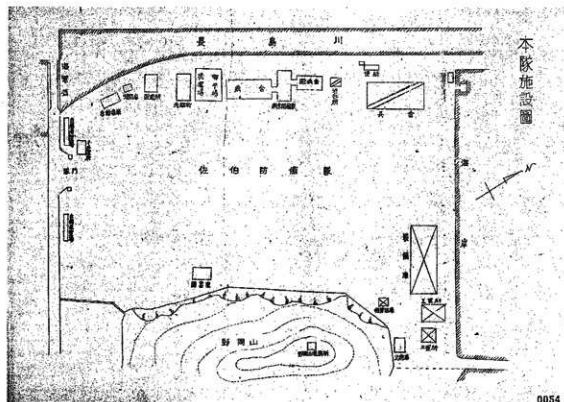
防衛庁防衛研究所図書館蔵「佐伯地区引渡目録資料」、戦後海軍施設を GHQ に引き渡すため、作成されたものの 2 頁分。防備隊資料は昭和 20 年 8 月 31 日、航空隊資料は同 9 月 1 日に作成されている。共に同じ配置の資料が九州財務局大分財務事務所に保管されていたが今回の調査では確認できず、防衛庁防衛研究所図書館のものを掲載した。また、今回別の資料から第 18 図中の飛行場にある第 2 指揮所の位置が表記されていることが判明した。⁽⁴⁾

科 海 航		科 信 通				科 術 砲						区 分		
見張所設		電探所	送信所	受信所	機銃砲台		高角砲台	海面砲台			配 備			
水ノ子	大 島	沖ノ島	深 島	下 堅田	防備隊庁舎	沖ノ島	深 島	大分砲台	野岡山	女 島	龜来島	丹 崎	兵 器 装 備	
十二型遠望鏡	八種双眼望遠鏡	飯称三式一号電探受信機一型改一	飯称三式一号電探受信機一型改一	九二式電波探査機改一	九二式電波探査機改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九六式四〇口径七種高射砲	四式四米半 測照灯	四〇口径安式十五種砲	四〇口径安式十五種砲	電動直流発電機
T M 式経度電信機	九七式特五号送信機	飯称三式一号電探受信機一型改一	飯称三式一号電探受信機一型改一	九二式電波探査機改一	九二式電波探査機改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	八八式四〇口径七種高射砲	四式四米半 測照灯	四〇口径安式十五種砲	四〇口径安式十五種砲	子ゼル交流発電機
	七種探照鏡	飯称電波探知機	飯称電波探知機	九二式電波探査機改一	九二式電波探査機改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	十二種双眼望遠鏡	子ゼル交流発電機	子ゼル交流発電機	子ゼル交流発電機	子ゼル交流発電機
	七種探照鏡	飯称電波探知機	飯称電波探知機	九二式電波探査機改一	九二式電波探査機改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一	九三式十三耗単装一型改一					

第 2 表 佐伯防備隊兵器装備一覧



第 18 図 「佐伯海軍航空隊・居住区・水上隊・陸上隊格納庫・地帯略圖」



第 19 図 「佐伯防衛隊本隊施設圖」

佐伯海軍航空隊飛行場爆撃時航空写真

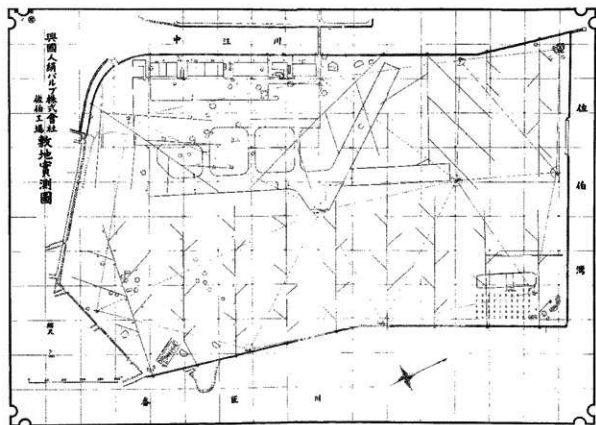
国立国会図書館憲政資料室所蔵USSBS「空襲損害評価報告書」より、昭和20年5月11日に撮影されたものである。飛行場南側の東西に広がる爆撃について、同報告書中には爆弾の破裂は27発と記されている。現在も海上自衛隊佐伯分遣隊庁舎（旧航空隊庁舎）には、この時建物を貫通した不発弾の補修痕が残っている。

「興国人絹バルブ株式会社佐伯工場敷地實測圖」写

福西正道氏所蔵、縮尺1/1700、昭和24～27年の間作成、幅1020mm、高さ746mm。工場着工前に作られた敷地測量図。敷地全体に枝状に伸びる破線は増築、破線で引かれた円は主に20年5月11日空襲時の着弾炸裂痕である。100m間隔で方眼線が引かれ、交点には水準値も記入されている。掩体壕は今回の調査対象3基の他3基が左下に見える。図中右下に描かれている人小方形の構造群の性格は不明である。



第 20 図 佐伯海軍航空隊飛行場爆撃時航空写真



第21図「興國人網ハルブ株式会社佐伯工場敷地實測圖」写

註1 米国防務調査団 (United States Strategic Bombing Survey : USSBS) は、第二次世界大戦終結後、米軍による戦略爆撃の効果を検証するため設けられた米陸軍部の合同機関で、ヨーロッパ戦域と太平洋戦域でそれぞれ調査を行い最終報告書 (Final Reports) をまとめた。その際に収集した資料の名称。

註2 昭和20年3月18日空襲時の損傷等を対照し考察を加えている。

註3 本書第18図「佐伯航空隊・居住区・水上陸上隊格納庫・地帯略図」(p.30参照)

註4 口絵に掲載した清水建設株式会社所蔵「佐伯航空隊陸上隊」写真に各施設名が裏書されている。工事請負業者の完成写真記録として信頼性が高い。

第3表 年表

1941	東京遷移、取捨手廻	毛利高謙退任を希望し佐伯専ら事となる	
1942	松原軍営	7.14 松原軍営の冠部が下り佐伯軍となり、松原以下の人員を併合とする	
1942	口津修好条約締結	11 兼役7員を併せて大分県とする	
1942	陸・海軍両省改定	大分県支庁を併合し置く、県内10支庁を8支庁とする	
1942	豫兵卒公布		
1942	憲法第9条新編案公布	飯塚村と大野村とを合併し大分県第4区26小區併合村となる	
1942	西南戦争おこる		5 薩摩軍300名が竹園に突入、新田町森山内八郎長を名を本郷とする 海軍の渡岡艦、守後村に乗り現任を襲撃する
1942	備後地方(神鏡川を境)	山形に南備前郡鏡川留所できる 松山第九丸丸立銀行開業	12 関ノ谷に砲臺基地を設け、戦死者を葬る
1942	軍令第四四號	8 汽配「他件丸」進水する	
1942	軍令第四五號	軍人勲章公布	
1942	軍令第四六號	佐伯町、城下から松窪への道路が開通	
1942	軍令第四七號	9 月本郷丸、松山港(松山)を開港する	
1942	大日本帝國憲法公布	4-1 市町村区域施行され、松山町発足、初代町長に吉原昌徳就任	関ノ谷、砲臺基地に砲臺/神建設される
1942	文官任用令公布	松山町は洪水となり市街家屋過半浸水	
1942	日清戦争はじまる		11 大子前で戦勝祝賀大会
1942	下関条約締結、一四子沙		
1942	治安警察法公布、警部大臣兼警務局長に吉原昌徳就任		
1942	日英同盟締結		
1942	日露戦争はじまる		
1942	ゴッホマン条約締結		1 旗幟掲揚、祝勝会を軍人に行方
1942	政府府銀行、関東都府府会設立		3 奉天占領、学校生徒の旅行列、今町をわたる
1942	伊勢湾文ハルビンで締結される		6 11月海軍の艦艇より国会議事堂で大砲利祝賀
1942		佐伯電灯会社設置、12月初めで電灯つく	2 高等小学校で演習兵士141名を用き祝勝会、旅行列、提灯行列で祝勝を祝賀する
1942			10 東京遷下、海軍工廠で併合開始/行書
1942		2話簡論	
1942		9 暴風雨、大洪水で被害甚大	
1942	第一次世界大戦に参戦		9 入島丸島田川に船難事故発生
1942		佐伯町会、松山の政務方を引継ぎ決定	
1942		10 日露戦争終結まで開通	
1942	本郷線、シベリア川流		休戦投資貸付行列
1942	アルサイニ条約締結		3 佐伯町・高尾・松山町の間に防備砲台を築城決定
1942	西條道雄に加入		8 「築城論議」支那を佐賀藩に渡す
1942	ワシントン海軍軍縮条約締結		
1942	西川藩村宮内大臣13戸絶滅		
1942	治安警察法、普通選挙法成立		
1942			8 臨時大会より議見調停の「軍事施設」が下命される
1942			「急事委員会」が佐伯製に発生
1942			天皇崩御、近衛艦隊演習結果が佐伯の町に伝わる
1942	朝鮮軍縮条約締結		
1942	松山町火災26戸全焼、茶屋・店舗及び焼夷機開通する		
1942	漢州事変		2-28 町議会は南平航空隊を松山に誘致することを決議、坂で決起
1942			3 海軍航空隊設置促進委員会より期成会発足
1942			4 航空隊誘致運動効果を奏し、終戦地島津/洲の洲が開始される
1942			4-6 朝日会が町民大会を開催
1942			9 海軍航空隊設置決定、海軍航空隊用地買収終わる
1942			9 豊子雲霧島見物船内装工
1942			11 初島島処理立て着工

時期	出来	出来の概要	出来	出来
1942	1	九州国策基	-	12 平島長島砲台工
1943	2	陸軍航空隊建設	-	1 長島上陸作戦をはじめ、庁舎を長島砲台跡地の遺構で作り、佐伯駅より、航空隊より通する横須賀の道路開工。長島川を渡る橋(海軍橋)着工
1943	3	ワシントン海軍軍縮条約締結	-	1 中山川突進工事、土浦1号車、1号倉、兵舎、その他飛行機修繕庫着工 4 水上機滑走路完成 7-15 佐伯海軍航空隊機庫棟、長島海軍倉庫の広島作業者入 大分県兵隊佐伯分遣隊機庫 10 航空隊庁舎完成 11 佐伯海軍航空隊、航空工務会法人に舉行
1944	4	政府国体開催声明	佐伯町大洗20戸集決	9-15 陸上飛行場・格納庫完成 機庫完成
1944	5	ワシントン軍縮会議開催	-	7-11 第12航空隊、佐伯航空隊基地で開隊、第2聯合航空隊(第2航空隊)編入 9-5 第3艦隊編入 12 南島隊庫、校舎飛行機行列 3 防空演習要員される 11-3 第1防衛隊開隊
1944	6	日独防共協定締結	4 仏仏町、鶴岡町・上野村上合併、人口22956人、戸数4321戸	11-15 第1航空隊、中国方面艦隊航空となる
1944	7	日独防共協定締結	日独防共協定締結	9-15 第12航空隊編入
1944	8	西条海軍航空隊公布	西条海軍航空隊公布	11-3 第1防衛隊開隊
1944	9	日独防共協定締結	日独防共協定締結	11-15 第1航空隊、中国方面艦隊航空となる
1944	10	日独防共協定締結	4 29 佐伯市、八幡村、入島村、西上浦村を廃しその区域をもつて佐伯市を置く、別代市を新設(市長安丸、人口36972人、戸数7827)	9-15 第12航空隊編入
1944	11	西条海軍航空隊公布	西条海軍航空隊公布	11-3 第1防衛隊開隊
1944	12	ミッドウェー海戦	6 ミッドウェー海戦	11-15 第1航空隊、中国方面艦隊航空となる
1944	13	学徒出陣	9 豊阿川大洪水により市街全域浸水、兵隊病死者	11-15 第1航空隊、中国方面艦隊航空となる
1944	14	2 決戦非常措置要綱決定 6 ライオン兵隊節 木口塗料普及化	-	7-1 第33航空隊(艦隊・艦隊)、佐伯航空隊基地で開隊 佐伯海軍航空隊、佐伯市街から兵隊建設隊に編入 艦隊節化にともない、市民防衛要員づくり、勤労奉仕作業につとめる 佐伯中学・佐伯商女の生徒、福岡・仏島の菜園1區に勤労見せる 2-1 第93航空隊(97艦隊機庫)開隊、本隊解散 3 佐伯航空隊基地開隊者として、女性志願者14名採用 9-1 第93航空隊、水上偵察機隊開隊 3 18 8:30ごろ艦隊機庫による初空襲 4-26 敵機初空襲、船山頂上の毛利神社本殿、佐伯中学校在舎、佐伯商校、海軍の共同防空壕に被害発生、この日一日46名被害 4-29 艦隊56機襲、被害は軽微なる 5-4 米軍機による空襲、飛行機の被害機庫10機 5-11 4度目の空襲(820)、庁舎を中心に機庫、庁舎を広く不燃材が受 9-13 米軍機隊九州州中に侵入、艦隊機庫の攻撃により防衛隊全滅 5-14 主として航空隊を襲う、格納庫を初め飛行機、歩道橋、その他艦隊的被害 6-23 10:00ごろ29 1機機庫に投擲 7-20 仏海軍航空隊、第3時夜襲隊に編入 7-24 6型機隊の襲撃にわたって航空隊河川に空襲 7 25 6:02と12:00の2回にわたり艦隊機庫を襲う2回 8-14 轟谷にロケット弾11発落下(死亡4名 負傷)
1945	1	9-6 広島・8-9 長崎に原爆投下 9-14 ボツダム宣言受領 9-15 天皇、戦勝の御詔勅	-	12 平島長島砲台工

第V章 まとめ

今回の現地調査で濃霞山45基、長島山61基、興人4基、総数110基(内地下塚43基)の日本海軍に関する遺構の分布と残存状況が確認できた。最後に史料調査により判明した遺構の機能、施設名を合わせて佐伯海軍航空隊、佐伯防衛隊及び関連施設の成立過程をⅢ期に分けまとめる。

Ⅰ期 昭和8～16年12月(佐伯海軍航空隊施設着工～真珠湾攻撃開始前)

長島山に境界石(長島山29・36～39)¹⁾が設置され、航空隊施設に着工、庁舎、兵舎等が完成し、昭和9年2月15日佐伯海軍航空隊が開隊する。航空隊附機庫である木工場(濃霞山11)、第一燃料庫(長島山7)、第二燃料庫(長島山6)、酒粕油庫(長島山8)、突進庫庫(長島山9)、演習機庫(長島山10)、火工品庫(長島山11)²⁾、建設に関する記録は確認できなかったが、その工法、構造から成立をこの時期と考えた。次いで昭和10年3月15日に陸上飛行場が完成³⁾、第二指揮所(興人4)⁴⁾もこれと同時に建てられたと考えるのが妥当であろう。

昭和14年11月3日⁵⁾には佐伯防衛隊が開隊し、付属施設として火薬庫(濃霞山5)⁶⁾と工業部(濃霞山13)、内務科特務部(濃霞山14)、砲術科(濃霞山15)、捕魚部(濃霞山16)、測門部防空壕(濃霞山17)⁷⁾の各地下塚が造られる。これらの建設時期の特定はできないが施設の性格上この時期とする。

特記すべき遺構は二重巻上構造の長島山11である。壕内を低温低湿に保ち、保管する火工品の性能を長く保持させるための特有の構造が見られる。

Ⅱ期 昭和16年12月～20年3月(真珠湾攻撃後～本土決戦準備)

昭和19年1月掩体壕(興人1他)建設位置設定のため測量が行われる⁸⁾。

この時期の末になると戦局悪化のため、市民の勤労奉仕により市内各所に防空壕が造られた。また海軍地上施設の機能も同時地下壕内に移管され、本調査で多数確認できた素掘の壕も同時期から掘削が開始されたと考えられる。

昭和20年3月18日佐伯市は初空襲を受け、濃霞山機銃陣地から米軍艦隊に対し応戦する⁹⁾。長島山機銃陣地(長島26-1～4)は境界的に航空隊管轄であるため防衛隊史料には載っておらず、装備を示す史料は確認できなかった。配備された機銃の型式を濃霞山装置¹⁰⁾と長島山機銃台座の遺構観察より推測し挙げるとすれば、96式25 耗2連装が有力であるが確定はできなかった¹¹⁾。この後同年4月には航空隊の戦術指揮所(長島山30)¹²⁾が航空隊庁舎後背の長島山中腹に完成している。鉄筋コンクリート造、厚さ1.2mの外壁はおおよそ250kg爆弾の直撃に耐えられるように造られている。

Ⅲ期 昭和20年4月～同年8月15日(本土決戦体制～終戦)

市内への空襲は、昭和20年3月18日に始まり、同年8月14日まで断続的に続いた。

濃霞山、長島山には円形の窪地(濃霞山44・45、長島山31～35)が点在し、大きいもので直径15m、深さ3mを測る。表土の薄い硬質の岩盤を挟んでいることから倒木の根痕とは考え難く、1948

年来国極東空軍の空撮写真に残る痕と位置が合うものもあり、空襲時の爆弾の炸裂痕と考えられる。防備隊受信所（濃霞山19・34）¹³⁾をはじめその他の素掘の壕は、完成することなく終戦を迎える。

以上12年間の遺構の編年を断片的であるが試みた。遺構に対する記録資料の裏付けにより、本遺跡には日中戦争から太平洋戦争終結までの時期、歴史的に重要な役割を果たした軍事施設が数多く存在することがわかった。今回調査した地下壕群、掩体壕等の他にも航空隊庁舎、第2指揮所等が残されている。さらに、空襲による爆弾の炸裂痕も明瞭に確認できた。市街地にもかかわらずこれらの遺構が破壊を免れ、ほぼ良好な状態で残存する遺跡は国内でも数少なく、貴重な遺産であるといえる。

戦後60年が経過し今回の調査は行われた。既にかかなりの遺構が姿を消し、多くの記録史料がその特殊性もあり廃棄、散逸している。当時の記憶を持っている方も少なくなってきている。そのような中、市民の皆様をはじめ関係各位の多大な御協力をいただき、本調査報告書を刊行することができた。ここに感謝の意を記し、結びの言葉とする。

註1 山口県教育庁文化財保護課編 『山口県の近代化遺産』1998 (p.119) を参照

註2 本書第18図「佐伯海軍航空隊・居住区、水上隊、陸上隊格納庫・地帯略圖」(p.30) を参照

註3 豊州新聞社『豊州新報』昭和8年～同14年

註4 本書先述の註4 (p.32) を参照

註5 註3に同じ

註6 本書第19図「佐伯防備隊本隊施設図」(p.30) を参照

註7 各遺構に所属部名を刻んだ標識が取り付けられている。

註8 当時測量に従事していた女島住居の岩本幸作さんの証言

註9 『佐伯防備隊戦闘詳報 第一號』を参照

註10 本書第2表 佐伯防備隊兵器装備一覧 (p.29) を参照

註11 遺構の円形窪に96式25mm2連装機銃を据えると平面的には取まり、射角20°～85°となる。しかし隔壁の孔の奥行は22cmなので、25mm 榴弾型装(幅43cm、高さ26cm、厚み9cm)を縦に置くと4cm程外に突き出る。

註12 河野豊編『遺体驗佐伯と海軍』(p.48) を参照

註13 九州財務局大分財務事務所資料「旧佐伯防備隊見取圖73・76」より

【参考文献】 浄法寺朝美『日本築城史』1971 原書房

海軍施設系技術官の記録刊行委員会編『海軍施設系技術官の記録』1972

財団法人 海軍歴史保存会編『日本海軍史』1995

神戸舞夫編『おおいの戦争遺跡』2005



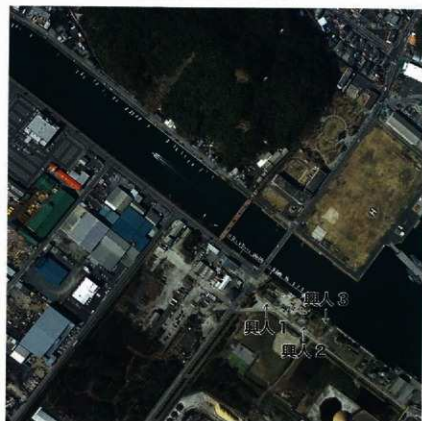
濃霞山(南西から)



長島山(西から)



長島山山頂 機銃台座跡



掩体壕



濃霞山1



濃霞山5



濃霞山8



濃霞山11



濃霞山13 標識



濃霞山13



濃霞山14 標識



濃霞山14



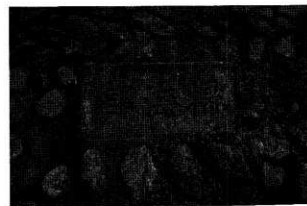
濃霞山 15 標識



濃霞山 15



濃霞山 16・17



濃霞山 16 標識



濃霞山 16



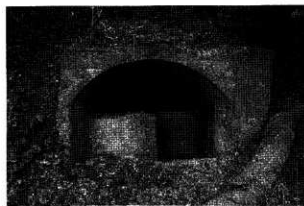
濃霞山 17 標識



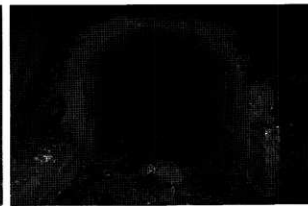
濃霞山 17



濃霞山 18



濃霞山 19



濃霞山 19 内部施工途中



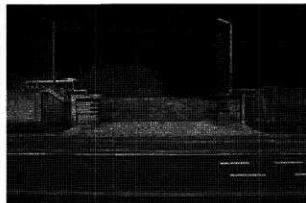
濃霞山 34



濃霞山 23



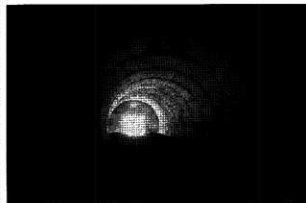
濃霞山 27



濃霞山 28



濃霞山 30



濃霞山 30 開口部 (壕内より)



濃霞山 39



濃霞山 43



長島山 5 ~ 11



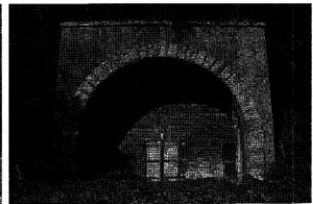
長島山 6



長島山 8



長島山 9



長島山 11

図版 8



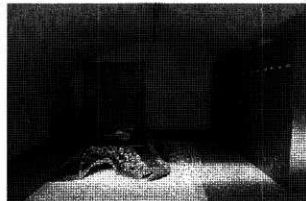
長島山 11 被弾状況



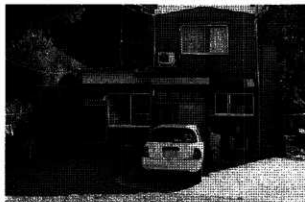
長島山 13



長島山 15 (長島山 15 は建物に内包)



長島山 15



長島山 17 (右は障壁)



長島山 26 北 全景



長島山 26-2 機銃台座



長島山 26-2 機銃台座軸受部

図版 9



長島山 26-5 掩蔽部天蓋



長島山 26-6



長島山 26-10 建物跡 (正面より)



長島山 26-10 水槽縁に「高」の字



長島山 30-1・8～11



長島山 30-3 開口部 (壕内より)



長島山 30-3 開口部 (壕内より)



長島山 30-6



長島山 34 (白線が範囲)



長島山 38 境界柱



興人 1 掩体壕



興人 3 掩体壕



興人 4

報告書抄録

書名	佐伯市戦争遺跡 濃霞山-長島山-興人
副書名	平成16・17年度遺跡分布及び残存状況調査報告書
巻次	
シリーズ名	
編集者名	吉武 敦子 大谷 伸宏
編集機関	佐伯市教育委員会 熊延蔵文化財サポートシステム 大分支店
所在地	〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号 〒870-0942 大分県大分市大字羽田97番地1
発行年	2006年10月31日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
佐伯市戦争遺跡	大分県佐伯市	430						
濃霞山	鶴谷町2丁目 12427番6他			32° 58' 22"	131° 54' 32"	05.1.28 ~3.22	81072	
長島山	中江町12401番 1他			32° 58' 02"	131° 54' 45"			130813
興人	東浜11763番他			32° 58' 03"	131° 54' 12"	06.1.30 ~3.29	9000	
							計=220885	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺情	主な遺物	特記事項
佐伯市戦争遺跡	海軍施設	近代	コンクリート建築物		
濃霞山			地下壕		
長島山					
興人					

平成 16・17 年度
遺跡分布及び残存状況調査報告書

佐伯市戦争遺跡

濃霞山—長島山—興人

2006 年 10 月 31 日

発 行 佐伯市教育委員会
〒 876-8585 大分県佐伯市中村南町 4 番 1 号
TEL 0972-22-3111

印 刷 元屋印刷株式会社
〒 876-0811 大分県佐伯市鶴谷町 3 丁目 1 番 9 号
TEL 0972-24-0900